福岡市埋蔵文化財調査報告書第1121集

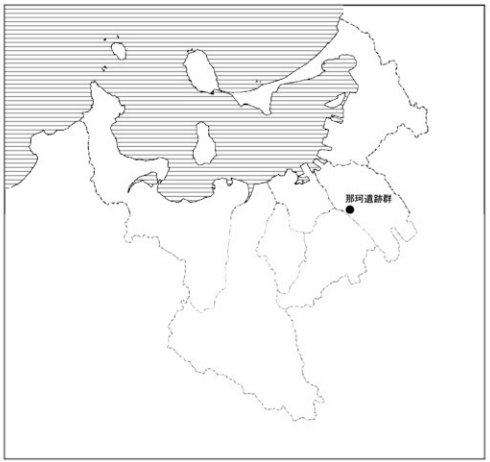
那珂58

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1121集

2011
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1121 集

那珂 58



遺跡略号　NAK－127
遺跡調査番号　1006

2011
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため、市内各所には、歴史的遺産が数多く残っています。本市は、これらを後世に残し伝え、市民の皆さまに活用していただくために、その保護と活用に取り組んでいるところであります。

福岡市教育委員会では、こうした取り組みの一環として、開発にともないやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存につとめています。

本書は、那珂中央公園整備工事にともない発掘調査を実施した、那珂遺跡群第127次調査の成果を報告するものです。本調査では、弥生時代・中世を中心としたさまざまな遺構が発見されました。これらは、当時の地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものです。本書が、市民の皆さまの文化財保護への理解を深める一助となると共に、学術研究にも貢献する資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心からの謝意を表します。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

例言

1．本書は博多区竹下５丁目地内における那珂中央公園整備工事に先だって、福岡市教育委員会が平成 22 年度に発掘調査を実施した那珂遺跡群第 127 次調査の調査報告書である。
2．本書の執筆・編集は松尾奈緒子が行った。
3．本書で使用した方位はすべて磁北であり、真北より６° 40′ 西偏している。
また、本書における座標は、国土座標第２系を用いている。
4．本書で用いた遺構の呼称は、溝を SD、井戸を SE、土坑を SK、ピットを SP と略号化している。
5．本書に掲載した遺構実測図の作成は松尾が行った。
6．本書に掲載した遺物実測図の作成は平川敬治・松尾が行い、製図は松尾が行った。
7．本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は松尾が行った。
8．輸入陶磁器については以下の文献の分類を参考にし、佐藤一郎氏のご教示を得た。
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集
9．石器については板倉有大氏のご教示を得た。
10．本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管・公開される予定である。

遺跡調査番号	１００６			遺跡略号	NAK-127
所在地	博多区竹下５丁目地内			分布地図番号	38-0085
開発面積	1,563 ㎡	調査対象面積	306 ㎡	調査面積	434 ㎡
調査期間	平成 22 年 4 月 19 日～平成 22 年 6 月 15 日			事前審査番号	20-1-199

本文目次

第１章　調査の経過と方法…… 1
（１）調査に至る経過 …… 1
（２）調査体制 …… 1
第２章　遺跡の地理的歴史的環境…… 2
（１）那珂遺跡群の位置と周辺遺跡 …… 2
（２）127 次調査地点の位置と那珂遺跡群のこれまでの調査 …… 4
第３章　調査の記録…… 7
（１）調査の概要 …… 7
（２）遺構と遺物 …… 10
ａ．弥生時代の遺構と遺物 …… 10
ｂ．古代・中世の遺構と遺物 …… 13
① 土坑 …… 13
② 井戸 …… 15
③ 溝 …… 17
ｃ．そのほかの遺物 …… 24
第４章　まとめ…… 26

挿図目次

［図］

Fig. 1　調査区周辺遺跡分布図（S=1/25,000）……3
Fig. 2　那珂遺跡群のこれまでの調査地点（S=8,000）……5
Fig. 3　周辺の調査地点（S=1/3,000）……6
Fig. 4　調査区位置図（S=1/800）……7
Fig. 5　調査区南壁土層図（S=1/40）……8
Fig. 6　遺構配置図（S=1/200）……8
Fig. 7　SK04 平面図・断面図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 10
Fig. 8　SK05 平面図・断面図（S=1/20）…… 11
Fig. 9　SK06 平面図・断面図（S=1/20）…… 11
Fig.10　SK05 出土遺物実測図（S=1/3）…… 11
Fig.11　SK09 平面図・断面図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 12
Fig.12　SK12 平面図・断面図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/2）…… 13
Fig.13　SK10 平面図・断面図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/2）…… 13
Fig.14　SK13 平面図・断面図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 14
Fig.15　SK48 平面図・断面図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/2）…… 14
Fig.16　SE08 平面図・断面図（S=1/30）…… 16
Fig.17　SE55 平面図・断面図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/2）…… 16

Fig.18　SD01 平面図・断面図（S=1/40）…… 18
Fig.19　SD01 および SD01・02 検出面出土遺物実測図（S=1/2）…… 19
Fig.20　SD02 南半・SD03 平面図（S=1/80）・断面図（S=1/40）…… 20
Fig.21　SD02 出土遺物実測図（S=1/3）…… 21
Fig.22　SD03 出土遺物実測図（S=1/3）…… 23
Fig.23　SD02 北半・SD14 平面図（S=1/80）・断面図（S=1/40）…… 23
Fig.24　SD14 出土遺物実測図（S=1/2）…… 24
Fig.25　そのほかの出土遺物実測図（S=1/1・1/3）…… 25
Fig.26　中世後期における周辺遺構配置図（S=1/3000）…… 27

［写真］
Ph. 1　調査区全景　西から …… 9
Ph. 2　調査区南側から 114 次調査地点をのぞむ …… 9
Ph. 3　SK04　西から …… 10
Ph. 4　SK05　南西から …… 11
Ph. 5　SK06　南から …… 11
Ph. 6　SK48　北から …… 14
Ph. 7　SE08　西から …… 15
Ph. 8　SD01　北から …… 18
Ph. 9　SD02　土層断面　北から① …… 20
Ph.10　SD02　土層断面　北から② …… 20
Ph.11　SD02　南半　北から …… 21
Ph.12　SD02　北半　南から …… 21
Ph.13　SD02　土層断面　北から③ …… 23
Ph.14　SD02　土層断面　北から④ …… 23

第１章　調査の経過と方法

（１）調査に至る経過

福岡市教育委員会は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。平成 21 年３月 18 日、福岡市博多区竹下５丁目地内において実施される那珂中央公園整備工事にさきだって、住宅都市局公園緑地部公園建設課から、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第１課に対して、埋蔵文化財の事前審査依頼が提出された（事前審査番号 20-1-199）。これをうけて、埋蔵文化財第１課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に位置しており（分布地図 37・38-0085）、かつ周辺で過去に数度の発掘調査を行っていたことから、遺跡が存在する可能性が高いと考え、確認調査の実施が必要である旨を回答し、同年３月 25 日に確認調査を実施した。確認調査では、地表下 45cm ～ 50cm で遺物包含層を確認し、地表下 60cm ～ 80cm で弥生時代から中世にいたる遺構・遺物を検出した。この結果に基づいて、住宅都市局と埋蔵文化財第１課は協議を行い、遺跡の存在が予想される部分を対象として、記録保存のための発掘調査を令達事業として実施することで合意した。発掘調査は平成 22 年４月 19 日から同年６月 15 日まで実施し（調査番号 1006・遺跡略号 NAK-127）、整理作業と報告書の刊行も平成 22 年度に行った。

（２）調査体制

調査委託：　住宅都市局公園緑地部公園建設課
調査主体：　福岡市教育委員会
調査総括：　埋蔵文化財第２課　課長　田中　壽夫
　　調査第１係長　米倉　秀紀
調査庶務：　埋蔵文化財第１課　管理係　井上　幸江
事前審査：　埋蔵文化財第１課　事前審査係　阿部　泰之
調査担当：　埋蔵文化財第２課　調査第１係　松尾奈緒子
調査作業：　石川洋子　上野照明　内野信代　大庭智子　小野千佳　小野山次吉　唐島栄子
　　草場恵子　許斐拓生　豊丸秀仁　永田とみ子　中村桂子　野口リウ子　服部弘勝
　　結城フヂ子
整理作業：　宮崎由美子　（五十音順・敬称略）

なお、発掘調査作業から報告書作成にいたるまで、住宅都市局の方々をはじめ地域住民等関係各位には多大なご協力とご理解をいただきました。記して感謝する次第です。

第２章　遺跡の地理的歴史的環境

（１）那珂遺跡群の位置と周辺遺跡

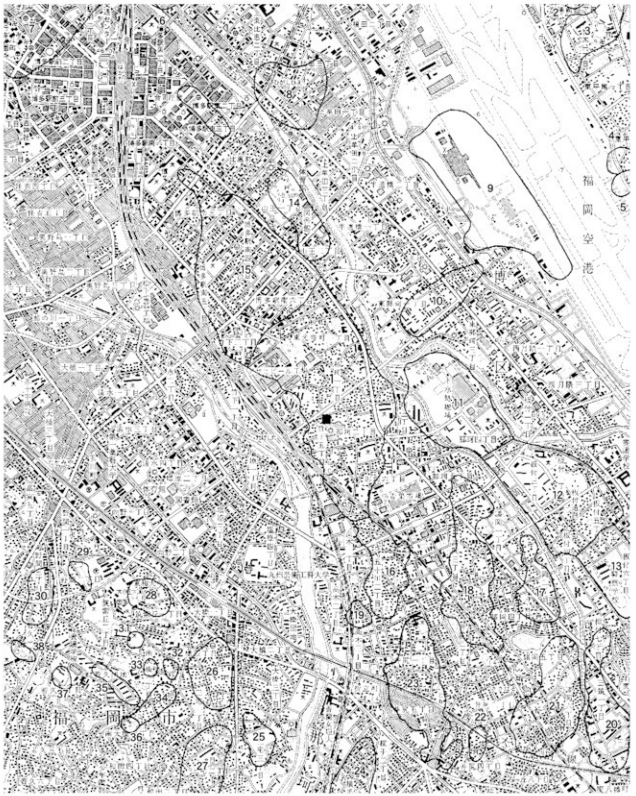
福岡平野は、那珂川・御笠川の沖積作用によって形成された沖積低地と、阿蘇山起源の Aso-4 火砕流によって形成された平坦な洪積台地からなる。このうちの洪積台地は、河川開析をうけて分断されながらも福岡平野を縦断するようにひろがっており、福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川、井尻、寺島、春日市須玖、下白水をへて那珂川安徳にのびる台地と、福岡市博多区板付から諸岡、麦野、元町をへて春日市春日原に達する台地の、２つのまとまりに分けることができる。福岡平野の人々は、古くから、このような洪積台地を拠点として生活をいとなんできた。このため、これらの台地上には、歴史的に重要な集落遺跡が数多く展開している。那珂遺跡群は、このような洪積台地上に展開する集落遺跡のうちの１つである。

那珂遺跡群は、福岡平野の北部に位置し、比恵遺跡群とともに、東西約 800 m、南北約 2400 mをはかる細長い独立台地の上に立地している。台地は、南端の最高所で 10.4 m、北端で５m前後をはかり、途中起伏をへながら北へゆるやかに傾斜している。中央部には鞍部があるため、福岡市では、この鞍部を境として、北側の遺跡を比恵遺跡群、南側の遺跡を那珂遺跡群と呼んでいる。しかし、この鞍部は中世以降の水田開発によるものの可能性が指摘されており、那珂遺跡群と比恵遺跡群の間には、遺跡の性格や時期的変遷などの多くの共通点があることから、那珂・比恵遺跡群として一括して議論することが多い。

このような那珂・比恵遺跡群がひろがる独立台地の東・西には、御笠川・諸岡川と那珂川が北流している。西側では那珂川によって台地がけずられ段丘崖をなし、氾濫原を形成するため、広く遺跡の空白地帯となっている。東側も同様に御笠川によって台地が削られているものの、河川そばまで遺構が検出されることから、本来は台地が東側まで広がっていた可能性が想定されている。御笠川のさらに東方にひろがる沖積低地では、生産遺跡である東比恵三丁目遺跡や東那珂遺跡、那珂君休遺跡が立地している。また、北側も、低湿地を挟んで博多遺跡群が展開する砂丘へとつづく。一方、那珂・比恵遺跡群の南側では、鞍部を介して五十川遺跡が展開する台地に連なっており、五十川遺跡以南にも、小規模な谷を挟んで井尻Ｂ遺跡、須玖遺跡群が展開する。

このような那珂遺跡群の周辺遺跡のなかで、とくに注目されるのは、那珂・比恵遺跡群が立地する台地から南方の春日丘陵にかけて立地する、須玖遺跡群や井尻Ｂ遺跡である。とくに、須玖遺跡群は、弥生時代中期前半から後期にかけてピークを迎える集落で、丘陵部では集落や墳墓群だけでなく青銅器埋納遺構や環濠が検出され、低地部では青銅器・ガラス製品鋳造関連遺物が多数出土するなど、ほかの集落にはない特異なありかたが知られており、弥生時代の福岡平野にあった奴国の中枢と指摘されている。また、井尻Ｂ遺跡は、青銅器・ガラス製品生産関連遺物などが出土する遺跡として、須玖遺跡群の衰退期である弥生時代終末頃にピークを迎える遺跡で、同時期に大集落に発展する那珂・比恵遺跡群と関係づけて議論される遺跡である。古墳時代中期以降は、那珂・比恵遺跡群と同じように低迷するが、その後、大宰府が成立する７世紀末～８世紀初頭になると、台地中央部において、井尻廃寺と指摘される寺院遺構や官衙遺構が検出されるようになり、再びピークを迎える。８世紀代には、井尻Ｂ遺跡の南側に古代官道水城西門ルートが整備される一方で、井尻遺跡北半では、郡衙があったと想定されている那珂遺跡群方面に延びる道路遺構が検出されており、注目されている。

［参考文献］
田崎博之 1988 年「福岡平野における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会



1. 那珂遺跡群（■は調査地点）　2. 上臼井遺跡　3. 席田青木遺跡　4. 久保園遺跡　5. 席田大谷遺跡　6. 吉塚遺跡
7. 博多遺跡群　8. 東比恵三丁目遺跡　9. 雀居遺跡　10. 東那珂遺跡　11. 那珂君休遺跡　12. 板付遺跡　13. 高畑遺跡
14. 山王遺跡　15. 比恵遺跡　16. 五十川遺跡　17. 諸岡Ｂ遺跡　18. 諸岡Ａ遺跡　19. 井尻Ａ遺跡　20. 三筑遺跡
21. 笹原遺跡　22. 井尻Ｃ遺跡　23. 井尻Ｂ遺跡　24. 横手遺跡　25. 三宅Ｃ遺跡　26. 大橋Ｅ遺跡　27. 三宅Ｂ遺跡
28. 野間Ｂ遺跡　29. 野間Ａ遺跡　30. 中村町遺跡　31. 大橋Ａ遺跡　32. 大橋Ｄ遺跡　33. 大橋Ｃ遺跡　34. 三宅Ａ遺跡
35. 大橋Ｂ遺跡　36. 和田田蔵池遺跡　37. 若久Ｂ遺跡　38. 若久Ａ遺跡

Fig.1　調査区周辺遺跡分布図（S = 1/25,000）

（２）那珂遺跡群のこれまでの調査と 127 次調査の位置

那珂遺跡群ではこれまで 130 次にわたって調査が行われ、比恵遺跡群とともに、弥生時代中期後半・古墳時代前期・古代前半にピークを迎える、福岡平野を代表する大規模遺跡であることがわかってきている。

那珂遺跡群が立地する台地は、旧石器時代から利用をうけていたことが確認されているが、縄文時代を通じて人の生活の痕跡はみとめられず、低い台地上に繁茂した森林は、狩猟・採集の対象として利用されていたと考えられる。

那珂遺跡群において遺構が検出されるようになるのは、縄文時代晩期末葉以降である。これは、人々が、水稲農耕の開始とともに、耕作地である沖積低地に面する台地縁辺を選地して集落を営み始めるためであり、那珂遺跡群だけでなく、比恵遺跡群においてもこのような現象がみられる。とくに、那珂遺跡群では、台地南西部に位置する 37 次調査において、縄文時代晩期末葉の二重環濠が確認されており、注目される。

このように台地縁辺に散発的に発生した水稲農耕開始期の集落は、弥生時代中期になると、台地中央部に進出し、弥生時代中期後半には大集落に発展して最初のピークを迎える。当該期には台地中央部を中心として、台地を東西に横断する大規模な区画溝や大型掘立柱建物、墳丘墓などの特殊な遺構が確認されている（20・21・22・114 次調査など）。

そして、弥生時代後期には一時的な衰退期を経験するものの、奴国の中枢ともいわれる福岡平野南部の須玖遺跡群がおとろえる、弥生時代終末頃には入れ替わるように再びピークを迎える。古墳時代前期まで機能したとおもわれる道路遺構が 1.5㎞ にわたって台地を縦断し、これと那珂八幡古墳を中軸とした計画的な墓域・集落域の配置がみとめられるようになる（114 次調査など）。

やがて、５世紀～６世紀になると再び集落規模は縮小するが、６世紀中頃に東光寺剣塚古墳が造営されたことを契機として再度集落は拡大し、７世紀代まで最後のピークを迎える。７世紀初頭には、６世紀後半に発展した集落にとってかわって、倉庫とみられる掘立柱建物群がもうけられる現象が確認されており、初期瓦などの出土とあわせて、官衙関連施設の造営が推測されている。このような動きは７世紀中頃以降もつづき、多重柵列や大型掘立柱建物群に加えて正方位の溝が多数発見されており、那珂郡衙がおかれた可能性も指摘されている（22・23・37・68・114・115 次調査など）。

その後、中世を迎えると、福岡平野の中心は内陸部から沿岸部の博多遺跡群にうつり、那珂遺跡群は弥生時代～古墳時代に比較すると、遺構密度は薄い状況となる。しかし、14 世紀から 16 世紀にかけては、台地各所で大きな溝がはりめぐらされる状況が確認されており、室町時代から戦国時代における大内氏・大友氏家臣団の知行地化との関連が想定されている（19・105 次調査など・Fig.6）。

本書で報告する 127 次調査は、那珂遺跡群の中央部、那珂八幡宮古墳の南東側に位置する。南側には、弥生時代中期後半を中心とする甕棺墓群や弥生時代終末期の道路遺構、古墳時代前期の円墳などが検出された 114 次調査、東側には、古墳時代前期の前方後方墳が検出された 62 次・83 次・84 次調査、西側には、６世紀後半～７世紀初頭の大型掘立柱建物が検出された 68 次調査、北側には、中世後半の大溝や地下式土壙などを検出した 19 次・105 次調査などがある。

127 次調査の着手前には、このような 114 次調査５区・81 次・19 次・105 次調査の結果をふまえ、中世を中心とする遺構の検出が予想された。

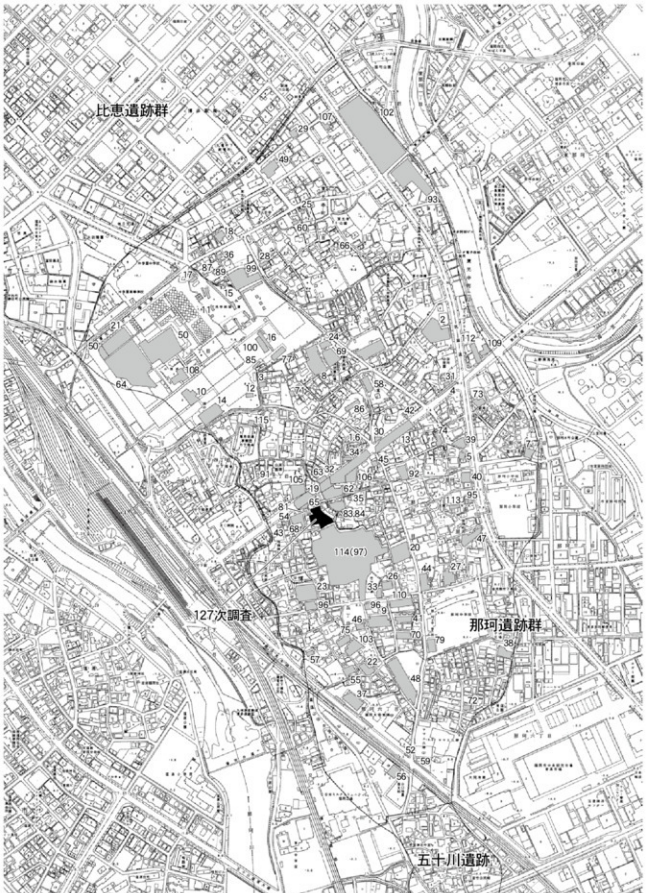


Fig.2　那珂遺跡群のこれまでの調査地点（S＝1/8,000）

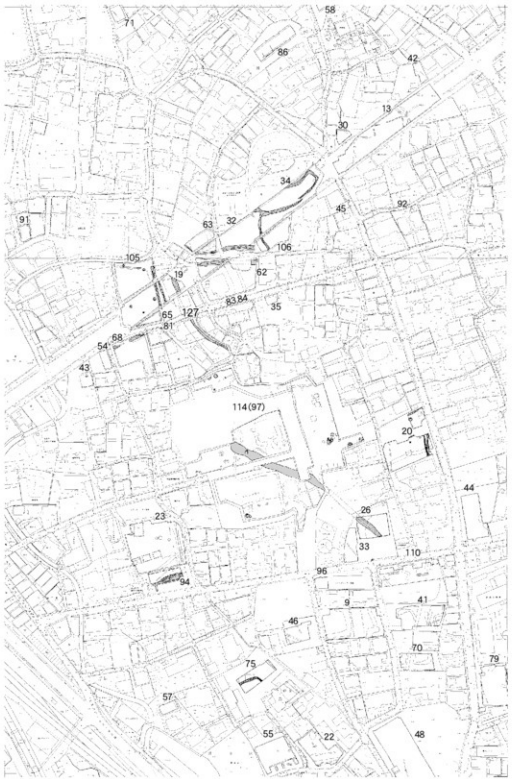


Fig.3　周辺の調査地点（S＝1/3,000）

（アミは中世後半（15 世紀代～ 16 世紀代））

第３章　発掘調査の記録

（１）調査の概要

発掘調査は平成 22 年４月 19 日より開始し、公園整備工事によって遺跡が破壊される範囲を対象として、重機による表土剥ぎから着手した。遺構面上層には暗褐色包含層が堆積していたが、遺構が検出されず、遺物もごく少量しか含まれていないことを考慮して重機によって除去し、鳥栖ローム層上面を遺構面とした。４月 21 日からは作業員を投入して遺構検出・遺構掘削を行い、検出された遺構には性質に関係なく 01 から連続する番号を付与して記録をとった。６月３日に全景写真撮影を行った後、重機による埋め戻しおよび機材撤収を終え、平成 22 年６月 15 日に調査を完了した。

遺構面の標高は南端で 7.2 m、北端で 6.7 mをはかり、調査区内において南から北へゆるやかに傾斜する。本調査地点は、以前は宅地として利用されていたため北側を中心に攪乱が顕著で、遺構の残存状況は良くない。また、本調査地点は周辺よりも低い地形にあったことから、そもそも遺構密度はうすかったようである。このため、検出できた遺構は周辺調査区に比べて少なく、そのほとんどは調査区南半に集中している。代表的なものとしては、弥生時代の土坑５基、中世の土坑２基・井戸２基・溝４条が挙げられる。遺物は、これらの遺構を中心に、弥生土器・土師器・須恵器・輸入陶磁器・黒曜石剥片などコンテナケース２箱分が出土した。

Fig.4　調査区位置図（S＝1/800）

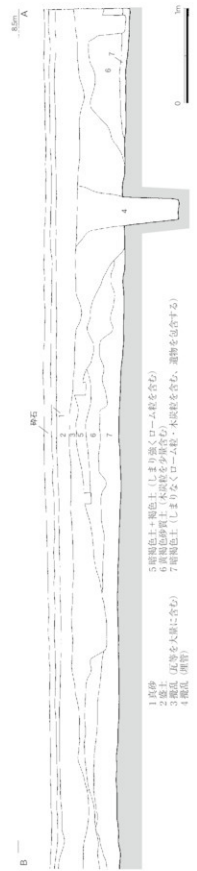


Fig.5　調査区南壁土層図（S＝1/40）

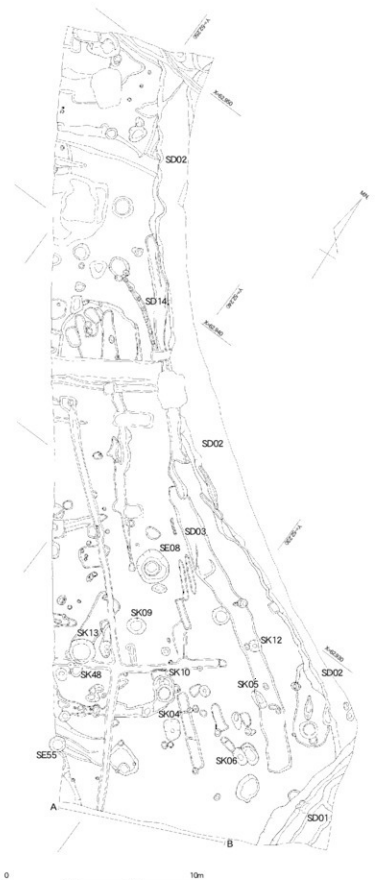


Fig.6　遺構配置図（S＝1/200）

Ph.1　調査区全景 西から

Ph.2　調査区南側から 114 次調査地点をのぞむ

（２）遺構と遺物

ａ．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、土坑５基を検出した。

このうちSK04は形状から柱穴と考えられ、SK05・SK06は用途不明であるが、同じ性格を有すると考えられる土坑である。

SK04（Fig.7・Ph.3）

調査区の南半中央に位置する立柱遺構である。弥生時代中期後半に位置付けられる。

標高7.4ｍ前後で検出し、北西－南東方向に長軸をもつ隅丸長方形のプランをなす。長さ1.15ｍ、幅0.85ｍ、検出面からの深さは1.1ｍをはかる。

検出後、0.3ｍほど掘り下げて柱痕跡の検出を試みたが確認できなかったため、そのまま掘削した。掘形は、検出面から0.6ｍの深さまで平坦面をつくることなく緩やかにすぼまり、そこから角度を急峻にしてさらに0.5ｍほど下がって円形の底面に至る。底面の大きさから、柱の直径は0.2ｍに復元できる。埋土はローム粒を含むかたくしまった黒色土である。

周辺に同じ規模・埋土の柱穴はなく、単体であることから、立柱遺構として報告するものである。

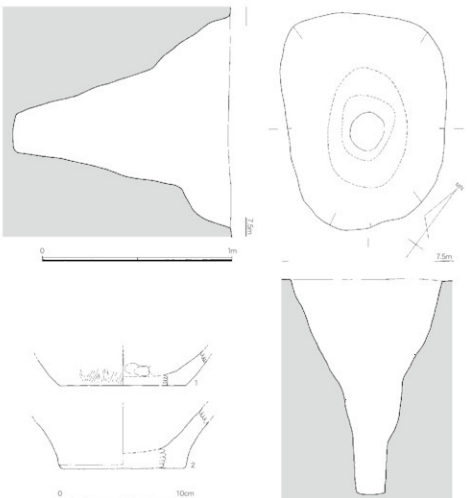
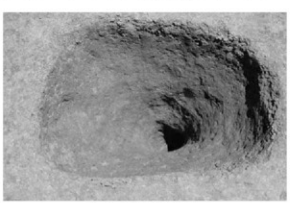


Fig.7　SK04 平面図・断面図（S＝1/20）・出土遺物実測図（S＝1/3）


Ph.3　SK04 西から

[SK04 出土遺物（Fig.7）**]**

弥生土器のみ出土した。

図示したものはいずれも底部片で、１は壺、２は甕。ともに摩滅が著しく、調整痕は観察できない。

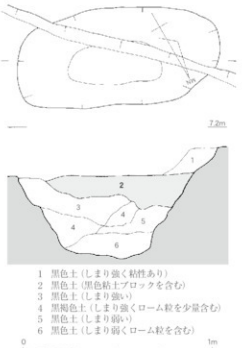


Fig.8 SK05　平面図・断面図（S＝1/20）

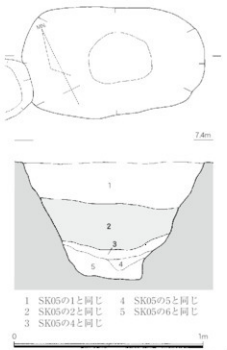
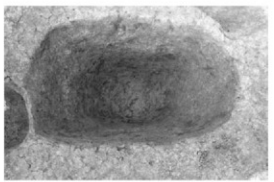


Fig.9 SK06　平面図・断面図（S＝1/20）

Ph.4　SK05 南西から


Ph.5　SK06 南から

SK05（Fig.8・Ph.4）

調査区の南半東よりに位置し、上面をSD03にきられる。弥生時代中期後半の土坑である。標高7.1ｍ前後で検出し、東西方向に長軸をもつ隅丸長方形のプランをなす。長さ1.05ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.6ｍをはかる。

[SK05 出土遺物（Fig.10）**]**

弥生土器のみ出土した。摩滅が著しいため調整等は観察できないものが多い。１は丹塗磨研された壺である。胴部上半の境界に三角突帯をはりつける。袋状口縁壺か。２は須玖Ⅱ式の鍵形口縁をもつ甕である。３は高坏で内外面に丹塗磨研を施す。

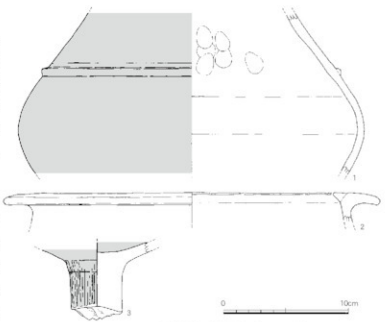


Fig.10　SK05 出土遺物実測図（S＝1/3）

SK06（Fig.9・Ph.5）

SK05の南側に位置する土坑である。西側を別の遺構にきられる。標高7.3ｍ前後で検出し、SK05と同じ東西方向に長軸をもつ隅丸長方形のプランをなす。長さ0.96ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.6ｍをはかる。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかにたちあがる。弥生土器の細片が出土したが、図化し得ない。

SK05・SK06

SK05およびSK06の埋土は、しまりが強く粒子の細かい黒色土を基本とするが、底面から約0.2ｍ～0.4ｍにある埋土中層（Fig.8・9土層注記2）に、こぶし程度の大きさの黒色粘土ブロックを多量に含むことが大きな特徴である。また、SK05・SK06は埋土の状況だけでなく、長軸をそろえて位置しており、規模もほぼ同じで、平面プランや掘形にも共通性がみられる。以上のことから、これらの土坑の機能は不明であるが、ほぼ同時期に同じ目的で掘削された遺構であるといえるだろう。

SK09（Fig.11）

SK04の北側に位置する、弥生時代中期の土坑である。検出面の標高は7.4ｍをはかる。北東－南西方向に長軸をもつ楕円形のプランをなし、長辺は1ｍ、短辺軸は0.85ｍで、検出面から深さ0.25ｍ程度残存する。底面からゆるやかにたちあがる形をなし、他の弥生時代の遺構とは異なり、埋土は黒褐色土を基本とする。

[SK09 出土遺物（Fig.11）]

弥生土器のみ出土した。器面の剥落がすすんでおり、調整等はよくわからないものがほとんどである。1は高坏である。調整は不明だが内外面に丹塗が施される。須玖Ⅰ式か。2は甕棺の底部である。周囲に甕棺を検出した調査地点は限られることから、本調査地点南側の114次調査区からの流入の可能性が考えられる。

SK12（Fig.12）

調査区の南半東よりに位置する。SD03完掘後にその床面において検出した。検出面の標高は6.8ｍ前後である。1辺0.5ｍ程度の隅丸方形のプランをなし、検出面からの深さは0.5ｍをはかる。底面は平坦面をつくらず、壁面はゆるやかに立ちあがる。平面的に柱痕跡の検出を試みたが確認することはできなかった。

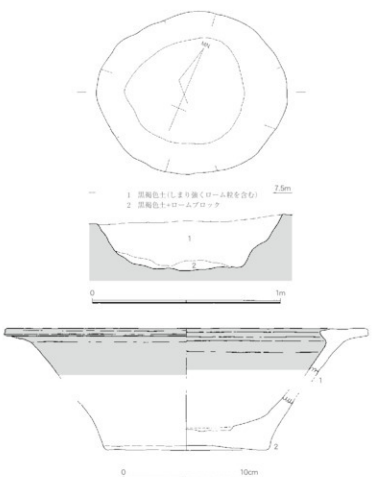


Fig.11　SK09 平面図・断面図（S＝1/20）・出土遺物実測図（S＝1/3）

埋土は、ほかの弥生時代の遺構と同様に、ローム粒を含みかたくしまった黒色土～黒褐色土を基本とする。

[SK12 出土遺物]

弥生土器のみ出土した。1は甕の底部である。外面に粗い縦方向のハケ調整が観察できる。2は器台の脚部である。内面に指オサエ、外面に縦方向のハケ調整がわずかにのこる。

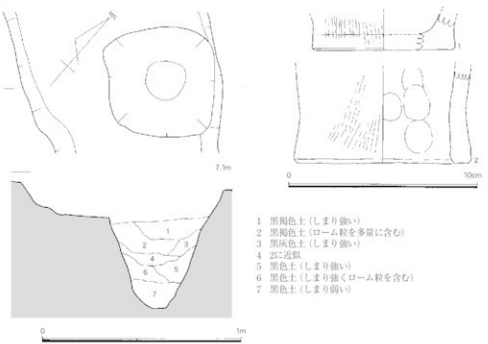


Fig.12　SK12 平面図・断面図（S＝1/20）・出土遺物実測図（S＝1/2）

b．古代・中世の遺構と遺物

古代の遺構はSK48のみであり、ほかの土坑2基、井戸2基、溝4条はすべて中世の所産である。

① 土坑

SK10（Fig.13）

SK04の北側に位置する中世前半の土坑である。標高7.3ｍで検出し、北側を撹乱に、南側を別の遺構にきられる。長軸を東西方向とする隅丸長方形のプランをなし、長辺0.85ｍ、短辺0.55ｍ、検出面からの深さ0.45ｍをはかる。底面はでこぼこしておりゆるやかに立ち上がる壁面へとつづく。埋土はローム粒を含むしまりの強い黒色土をベースとする。

[SK10 出土遺物（Fig.13）]

1は同安窯系青磁皿のⅠ類である。胎土は淡灰褐色、釉は褐色味を帯びた淡緑色である。

SK10からはこのほかに図化し得ない弥生土器の小片が出土している。その一方で中世の遺物は1以外出土していない。このため、SK10は弥生時代の遺構の可能性も考えられる。

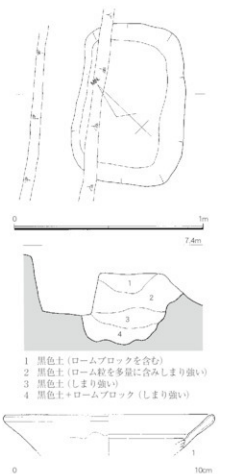


Fig.13　SK10 平面図・断面図（S＝1/20）
出土遺物実測図（S＝1/2）

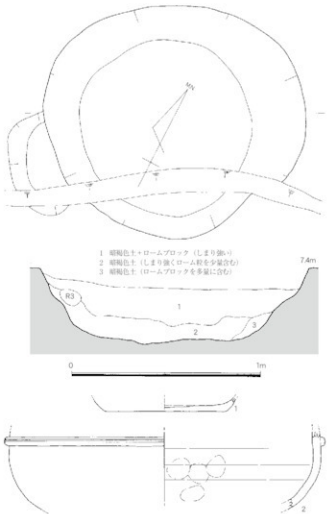


Fig.14　SK13 平面図・断面図（S＝1/20）
出土遺物実測図（S＝1/3）

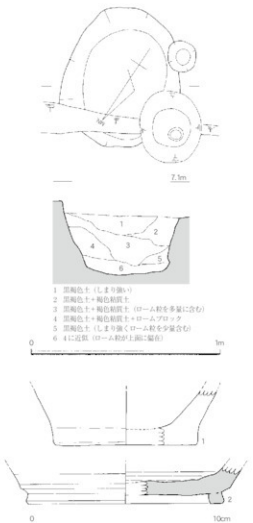
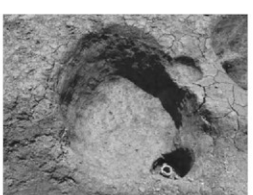


Fig.15　SK48 平面図・断面図（S＝1/20）
出土遺物実測図（S＝1/2）



Ph.6　SK48 北から

SK13（Fig.14）

SK09 の西側に位置する、中世後半の土坑である。検出面の標高は 7.4 m前後をはかり、南側の一部を攪乱にきられる。直径 1.2 m～ 1.4 mの円形のプランをなす。検出面からの深さは 0.4 m程度である。埋土はこぶし大程度の大きさのロームブロックを多量に含む暗褐色土をベースとする。他の遺構と異なり、埋め戻したような印象をうける。

[SK13 出土遺物（Fig.14）]

1 は土師皿である。定径は 9.4cm をはかる。摩滅が著しいため、底部の調整痕を観察することができない。2 は下層から出土した瓦質土器の湯釜である。摩滅がすすんでいるが、体部下半に貼りつけられた突帯にはナデの痕跡とおもわれる条線が観察できる。16 世紀代のものとおもわれる。3 は、第 1 層と第 2 層の境界で出土した弥生時代の砂岩製敲石である。下端と上端に敲打痕がありその周辺が剥落している。また、側面は被熱している。長さ 13.4cm、幅 9.4cm、厚さ 7.7cm、重量 1465.83g を測る。図示した遺物のほかには、土師器・須恵器の小片が出土している。

SK48（Fig.15・Ph. 6 ）

SK13 の南側に位置する、古代の土坑である。検出面の標高は 6.95 m前後をはかる。北側を攪乱にきられ、西側を別の遺構にきられる。南北方向に長軸をもつ楕円形のプランをなす。長さ 0.75 m、幅 0.6 m、検出面からの深さは 0.35 m程度である。埋土は、ローム粒を含む黒褐色土と褐色粘質土の混合土である。

[SK48 出土遺物（Fig.15）]

1 は弥生土器の甕である。摩滅が顕著で調整痕を観察することはできない。2 は須恵器碗である。高台断面形は方形を呈し、底部からのたちあがりは稜をなす。8 世紀代の所産である。図示した遺物のほかには、土師器・須恵器の小片が出土している。

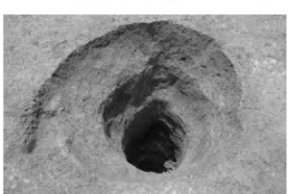
② 井戸

SE08（Fig.16・Ph.7）

SK09 の北側に位置する中世後半の素掘りの井戸である。検出面の標高は 7.4 m前後をはかる。検出面で確認した平面プランは、直径 1.7 m～ 1.8 mをはかる不整円形をなし、検出面から 3.1 m付近（標高約 4.3 m）で底面に至る。掘削中は標高 5.8 m付近から湧水が始まった。

底面は、直径約 0.5 mの平坦な不整円形で、ほぼ垂直にたちあがる壁面へとつづく。壁面は、検出面からの深さが 1 m前後（標高約 6.4 m）までほぼ垂直にたちあがり、そこから角度を変えてゆるやかに外へ開く。ただし、標高約 6.0 mから、八女粘土漸移層と八女粘土の境界である標高 5.2 mまでは、壁面が崩落する。

埋土は上層では拳大程度のロームブロックが混



Ph.7　SE08 西から

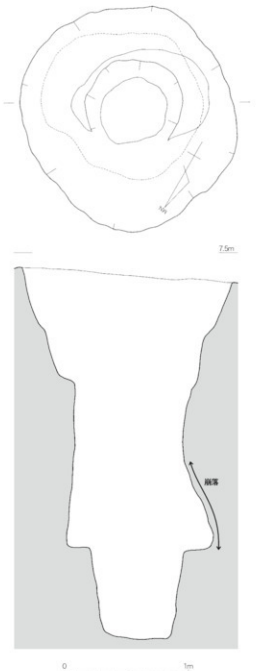


Fig.16　SE08 平面図・断面図（S＝1/30）

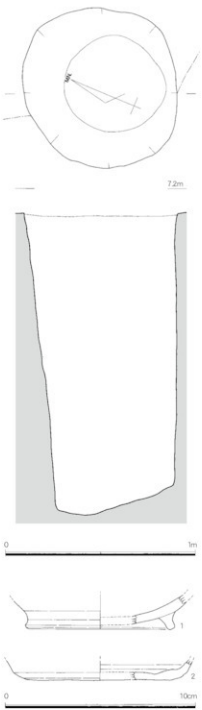


Fig.17　SE55 平面図・断面図（S＝1/20）
出土遺物実測図（S＝1/2）

じる灰褐色土で、下層ほど粘性を増し、暗灰色粘質土となる。底面では、八女粘土ブロックが混じる淡褐色シルトとなる。

遺物は、土師器・須恵器・輸入陶器・瓦質土器などのほかに、下層から細かい木片が出土した。いずれも細片であるため図化し得ない。

SE55（Fig.17）

調査区南西端に位置する素掘りの井戸である。西半は調査区外へとつづく。当初は、SE08 とは異なり、SK48 などに埋土が類似することから、土坑と認識して掘削をすすめていたが、掘削深度がある程度すすんだため、調査区を一部拡張して井戸として遺構掘削を行った。検出面の標高は 7.05 m前後をはかる。掘形は直径 0.8 mをはかる不整円形プランをなし、検出面から 1.6 m付近（標高約 5.6 m）で底面に至る。湧水はなかった。

底面は、直径約 0.55 mの不整円形で、南側から北側にむかって傾斜する。壁面は、南側はほぼ垂直にたちあがり、北側は若干外へひらく。埋土は、しまりの強いローム粒を含む暗褐色土をベースとし、底面付近ではよくしまった黒色土となる。

[SK55 出土遺物（Fig.17）]

1は内黒の黒色土器である。底部はゆるやかに湾曲し、隅丸方形の高台をもつ。高台径は 8.0cm をはかる。磨滅がすすんでおり、調整等は確認できない。2は口縁部を欠損する土師器坏である。底径は 7.6cm をはかる。淡褐色を呈し、底部はヘラ切り調整され、ケズリは施されない。

図示した遺物は、いずれも古代後半～中世初頭のものである。このほかには、弥生土器・須恵器・古代瓦・中世瓦などが出土している。いずれも細片であり、SE55 の時期はしぼりこめない。

③ 溝

SD01（Fig.18・Ph.8）

調査区南東隅を横切る溝状遺構である。中世後半に埋没したとおもわれる SD02 をきって掘削されており、遺構の大部分は調査区外にある。出土遺物が少ないため、時期をしぼりこむのは難しいが、SD02 から 16 世紀前半の遺物が出土することから、少なくとも 16 世紀以降の掘削と考えられる。

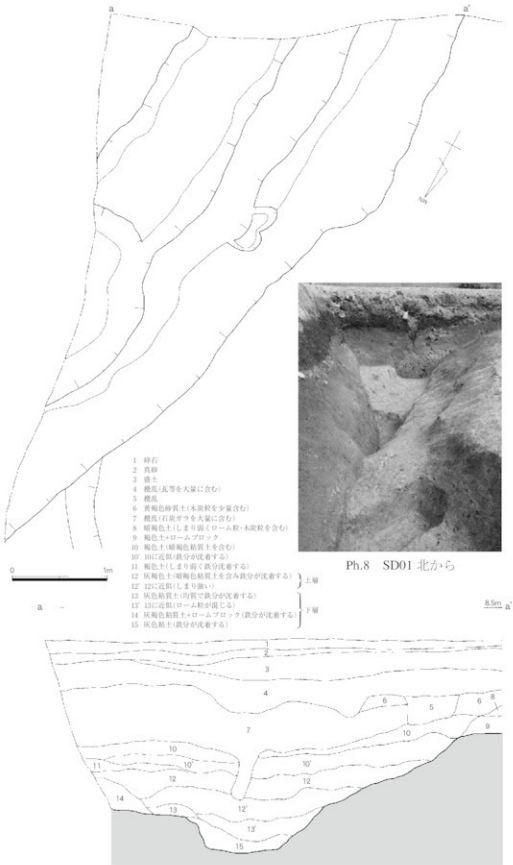
溝の主軸は磁北より若干東偏する。標高 7.35 m付近で検出し、検出面における最大幅は約 3.2 m、長さは最大 7.3 m、検出面からの深さは 1.28 mをはかる。断面形は全体で底面が平坦なU字状をなすとおもわれるが、検出面からの深さが 0.95 m前後（標高約 6.4 m）のところで、西側壁面に沿ってさらに深さ 0.35 mほど掘り下げて断面逆台形の溝を設けている。北側では、西側壁面の断面逆台形の溝が南側にむかってさらに 0.25 m～ 0.3 mほど深くなる。調査区東壁際で検出されたため、規模・形状・性格等はよくわからない。壁面・底面ともに掘削時の工具痕などはとくに観察されない。

埋土は、鉄分が沈着する灰褐色土を主体とし、底面に近くなるほど粘性が増す。とくに、底面付近には水分を含んだ灰色粘土が堆積している。滞水環境にあったと考えられるが恒常的な水の流れはないとおもわれる。

[SD01 出土遺物（Fig.19）]

土量に比べて出土遺物は少ない。2・4は SD01 検出面から出土しており、SD02 に帰属する可能性もある。

1は SD01 下層（Fig.18－土層 13・13'・14・15）から出土した移動式竈の庇部分である。体部および庇の先端部を欠損している。磨滅がすすんでおり調整等は観察できない。2は白磁碗Ⅴ類である。口径は 16.7cm をはかり、釉調は灰白色を呈する。体部下半から底部にかけては施釉されない。体部



Ph.8　SD01 北から

Fig.18　SD01 平面図・断面図（S = 1/40）

下半にはヘラケズリがほどこされ、内面には沈線がめぐる。11 世紀後半～ 12 世紀前半のものである。3 は SD01 の上層（Fig. 18- 土層 12・12'）から出土した明青花蓮子碗である。口径は 11. 2cm をはかる。15 世紀後半～ 16 世紀後半の所産である。4 は須恵質土器こね鉢である。口縁端部はやや肥厚するが下方への拡張は小さい。12 世紀前半のものか。5 は備前焼すり鉢である。上下に拡張した口縁端部外面に 2 本の凹線をいれる。外面の一部に自然釉がかかる。16 世紀代に位置付けられる。

図示したもの以外に、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器などが出土しているが、いずれも細片のため、図化し得ない。

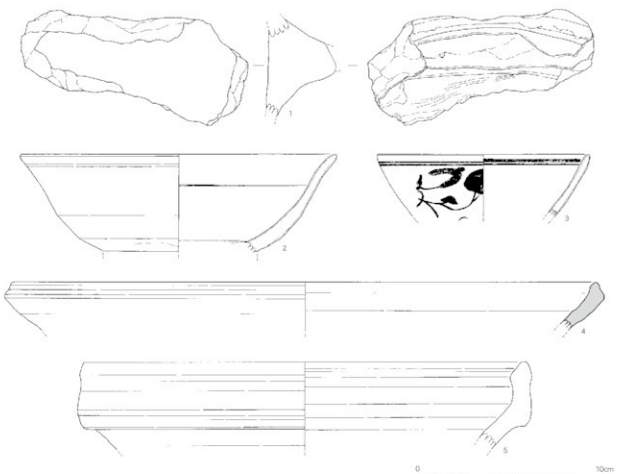
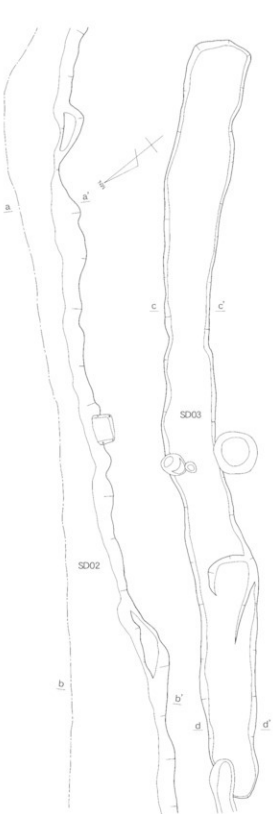


Fig.19　SD01 および SD01・02 検出面出土遺物実測図（S = 1/2）

SD02（Fig.6・20・23・Ph.9・14）

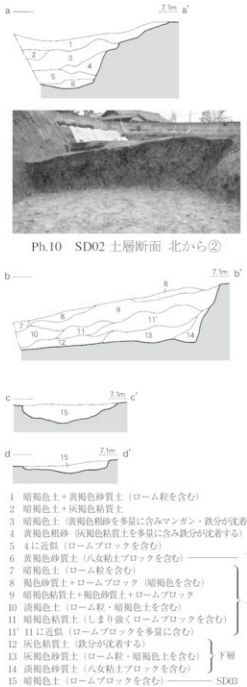
調査区東端の土地境界に沿って検出された、中世後半の溝状遺構である。東肩は調査区外にあり、南北は調査区外へつづく。南端を SD01 に、北端を攪乱にきられる。現在も、調査区東端には土地境界に沿うように水路が北流しており、SD02 はこの現代の水路の前身であると考えられる。南北に長いため Fig. 6・20・23 に分けて図示する。

本調査区では、溝の西肩のみを、南側で約 1. 2 m、北側で約 1. 8 m確認した。検出面の標高は南側で 7. 0 m、北で 6. 7 mをはかり、南から北へ傾斜し、同じように検出面からの深さも南側では 0. 7 m、北側で約 0. 45 mとなる。しかし、底面の標高は 6. 25 m前後で一定で、平坦である。断面形は箱形を



Ph.9　SD02 土層断面　北から①

Ph.10　SD02 土層断面　北から②



1　暗褐色土＋黄褐色砂質土（ローム粒を含む）
2　暗褐色土＋灰褐色粘質土
3　暗褐色土（黄褐色粗砂を多量に含みマンガン・鉄分が沈着する）
4　黄褐色粗砂（灰褐色粘質土を多量に含み鉄分が沈着する）
5　4に近似（ロームブロックを含む）
6　黄褐色砂質土（八女粘土ブロックを含む）
7　暗褐色土（ローム粒を含む）
8　褐色砂質土＋ロームブロック（暗褐色を含む）
9　暗褐色粘質土＋褐色砂質土＋ロームブロック
10　淡褐色土（ローム粒・暗褐色土を含む）
11　暗褐色粘質土（しまり強くロームブロックを含む）
11'　11に近似（ロームブロックを多量に含む）
12　灰色粘質土（鉄分が沈着する）
13　灰褐色砂質土（ローム粒・暗褐色土を含む）
14　淡褐色砂質土（八女粘土ブロックを含む）
15　暗褐色土（ロームブロックを含む）

上層
下層
上層
下層
SD03

Fig.20　SD02 南半・SD03 平面図（S = 1/80）・断面図（S = 1/40）

なすとおもわれるが、調査区北端付近では、底面を、さらに 0.35 mほど掘削してほりくぼめている。調査区東壁際で検出されたため、規模・形状などはよくわからない。また、壁面・底面ともに掘削時の工具痕などはとくに観察されない。

埋土は、暗褐色粘質土を主体とする上層（Fig. 20- 土層 1 ～ 5・7 ～ 11'）と灰黄褐色土～灰色粘土を主体とする下層（Fig. 20- 土層 6・12 ～ 14）にわけられる。下層には鉄分の沈着が顕著であり、底面付近にはロームブロックと水分を含んだ粘土が堆積している。滞水環境にあったと思われるが、恒常的な水の流れはなかったと考えられる。

Ph.11　SD02 南半　北から

Ph.12　SD02 北半　南から

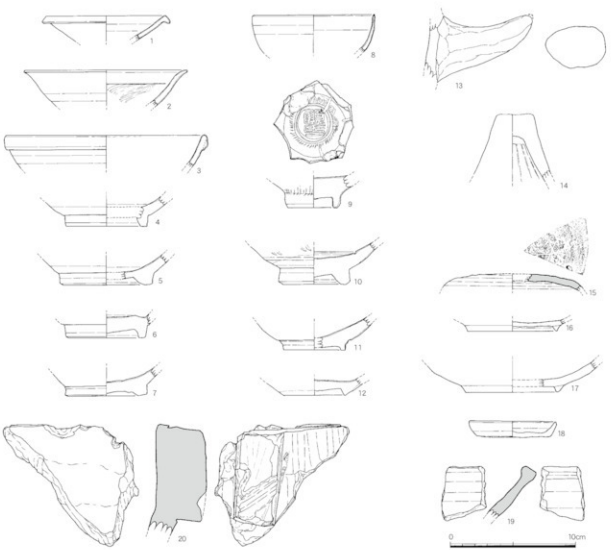


Fig.21　SD02 出土遺物実測図（S = 1/3）

［ SD02 出土遺物（Fig.21）］

10 は下層、10 以外はすべて上層から出土した。

1 ～ 7・10 はすべて白磁である。1 は口径 10.2cm をはかる皿Ⅳ類で、釉調は灰黄色を呈する。2 は碗Ⅵ類で、内面の体部上位に沈線がめぐりその下部に櫛目文がほどこされる。3 は玉縁口縁を有する碗Ⅳ類である。口縁直下からヘラケズリがほどこされる。5 は底径 7.4cm をはかる碗Ⅱ類である。高台外面は直に高台内面は斜めに削る。焼成があまく胎土は淡褐色を呈し、黄白色の釉はくすんでいる。4・6 は内面見込みの釉を輪状にかきとる碗Ⅷ類の底部である。4 は内面見込みに段はつかない。外面体部下半はヘラケズリされるが露胎である。6 は釉のかきとり部分が段をなし、目跡も付着する。7 は碗Ⅳ類である。内面底部にあったとおもわれる段あるいは沈線部分で欠損している。焼成があまく、釉には気泡があり胎土は淡赤橙色を呈する。10 はオリーブ黄色の釉がほどこされた白磁碗Ⅱ類である。体部下半にはヘラケズリが施され、高台は斜めに削られる。内面見込みには段をもうけ、外面には箆描文が施文されるようである。1 ～ 3・5・7・10 は 11 世紀後半～ 12 世紀前半、4・6 は 12 世紀中頃～ 12 世紀後半の所産である。

8・9・11・12 はすべて、青磁である。8 は口径 10cm をはかる小碗で、胎土は淡青灰色、釉は暗緑乳色を呈する。9 は上層から出土し、内面見込みに「顧氏」銘をもつ碗である。緑灰色の釉を全面にほどこし、施釉後に外底の釉を輪状にかきとる。15 世紀後半～ 16 世紀代の所産である。11 は底径 5cm をはかる小碗底部である。畳付の釉をかきとっている。8 と釉調が似るが、胎土は黒色粒・白色粒を多く含み粗い。12 は碁笥底の皿である。底径は 4.8cm をはかる。胎土は淡橙色、釉は黄味をおびた緑灰色を呈する。8・11・12 は 16 世紀代のものとおもわれる。

13 は甑の把手、14 は古式土師器の高坏あるいは鉢の脚部である。15 は須恵器坏蓋で、外面天井部にヘラ記号をのこす。16・17 は 12 世紀～ 13 世紀代とおもわれる瓦器椀底部である。摩滅がすすんでおり調整痕は観察できない。18 は口径 7cm、器高 1.3cm をはかる土師小皿である。底部は糸切り調整される。19 は須恵質土器こね鉢である。口縁部端部が上下にやや拡張する。20 は、縦方向に耳がつく滑石製石鍋である。用途は不明であるが転用されており、破面に研磨痕跡が観察される。11 世紀前半か。

このほかに弥生土器・古代瓦などが出土しているがいずれも細片のため図化し得ない。

SD03（Fig.20）

調査区南半東よりに位置する溝状遺構である。主軸は北東－南西方向をとり、SD02 の西側に沿うように掘削されている。標高 7.0 m～ 7.05 m付近で検出し、幅 0.9 m～ 1.32 m、長さ約 16 mをはかる。検出面から深さ 0.1 m～ 0.2 m残存するのみである。断面形は浅いU字形をなし、底面には凹凸がある。

埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。

出土遺物には図示したもの以外には鉄釘が出土するのみであり、時期の詳細は不明である。しかし、SD03 と SD02 の溝のカーブが一致することなどから、SD03 は SD02 と同時期に掘削されたものである可能性が高い。

［ SD03 出土遺物（Fig.22）］

1 ～ 4 すべてが弥生時代中期のものである。1・2 は広口壺である。1・2 ともに、口縁端部内外面に粘土を貼り付けることによって上端部を平坦化している。摩滅がすすんでおり調整等は観察できない。3 は口縁部上端および外面を丹塗磨研された甕である。口縁端部にヘラ状工具によって施された浅い刻目をもつ。4 は甕の底部である。外面に粗い縦方向のハケ調整を観察できる。

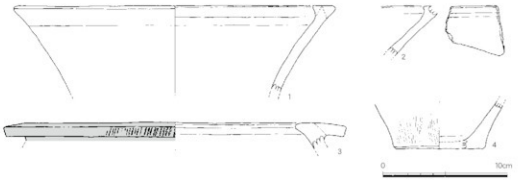


Fig.22　SD03 出土遺物実測図（S = 1/3）

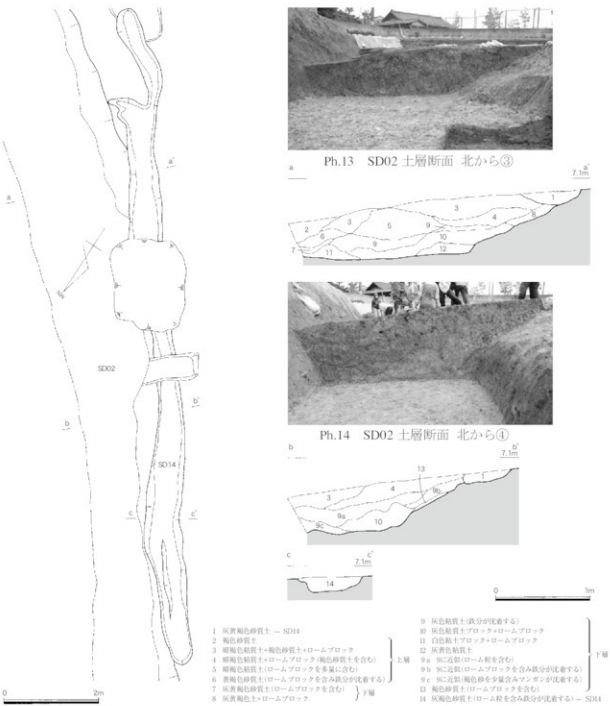


Fig.23　SD02 北半・SD14 平面図（S = 1/80）・断面図（S = 1/40）

Ph.13　SD02 土層断面　北から③

Ph.14　SD02 土層断面　北から④

SD14（Fig. 23）

調査区南半東よりに位置する中世末のものとおもわれる溝状遺構である。主軸は北東－南西方向をとり、中世後半のSD03の北端とSD02の西肩を一部きって、掘削されている。標高6.95 m～7 m付近で検出し、幅0.55 m～0.8 m、長さ約14 mをはかる。検出面から深さ0.15 m程度残存するのみである。断面形は浅いU字形をなし、一部底面が平坦になるところもある。埋土はローム粒を含む灰黄褐色砂質土で、鉄分が沈着する部分もある。

［SD14出土遺物（Fig. 24）］

1は11世紀後半～12世紀前半の白磁碗Ⅳ類である。底径は7.0cmをはかる。内面には青味かかった灰白色の釉が施され、底部付近に沈線がめぐる。体部下半から高台外面にはとび鉋によるケズリの痕跡が観察できる。2は福建省漳州窯産の染付皿である。底径は6.4cmをはかる。畳付には砂敷きで焼成された痕跡がのこる。16世紀末の所産である。

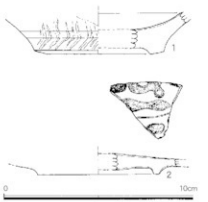


Fig.24　SD14出土遺物実測図（S＝1/2）

c．そのほかの遺物

1はSP19から出土した弥生土器蓋である。天井部の径は4.4cmをはかる。摩滅がすすんでおり、内面上部に縦方向の工具ナデの痕跡がある以外は、調整痕を観察することができない。土師器片をとともに出土した。2・3は、中世の柱穴SP53から出土した弥生土器甕底部である。2の底径は7.4cm、3の底径は9.8cmをはかる。ともに器面の剥落がいちじるしい。4は須恵器の鉢である。底径は17.2cmに復元できる。SP24から出土した。古代前半のものとおもわれる。5は攪乱から出土した、備前焼擂鉢である。底径は13.9cmをはかる。器表は灰赤色を呈し、胎土には白色砂粒が多く含まれる。擂目は直線的に密にもうけられ、摩耗がはげしい。6も攪乱から出土した土鍋である。口径は32.2cmをはかり、内面には横方向、外面には縦方向のハケ調整で仕上げられている。外面にはススが付着する。7はSP33から出土した明青花碗である。小片のため形態を推測することはできないが、内面は無文である。ほかにともなう遺物はない。8は土師器坏である。底部から直線的にたちあがり、外反する器形である。口径は11.8cm、器高は1.7cmをはかる。摩滅がすすんでおり、底部の調整を観察することはできない。土師器片が出土したSP29から出土した。9はSP46から須恵器片とともに出土した瓦器椀である。体部下半外面には粘土接合痕が観察できる。10は攪乱から出土した移動式竈の底部分である。内面は粗い縦方向のハケ調整で仕上げられる。

11は調査区北半の遺構検出時に出土した、黒曜石剥片である。石材は、黒色部分と灰褐色部分が墨流し状に混じり合うもので、腰岳産ではない可能性が高く、風化がすすんでいる。この剥片がまだ石核から剥ぎ出される以前は左斜め下方向を打面としていたが、計画的に剥片を得ようとする過程のなかで打面転換が行われ、剥出された打面調整剥片であると思われる。右上部には表皮が残存している。剥片に使用した痕跡もなく、二次的な加工痕跡もない。縄文時代前半期の所産と考えられる。重量は12.85gをはかる。

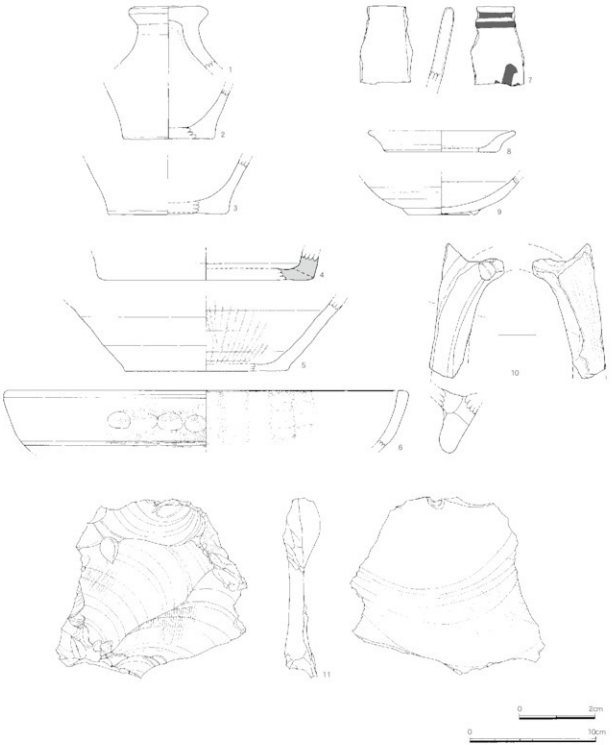


Fig.25　その他の出土遺物実測図（S＝1/1・1/3）　7・11のみ1/1

第４章　まとめ

本調査区の遺構面の標高は、南端で 7.2 m、北端で 6.7 mをはかり、調査区内において南から北へゆるやかに傾斜する。道路を隔てた南隣接地の 114 次調査 5 区の遺構面が約 8.3 m、東側の 83 次調査の遺構面が約 9.1 m、西側の 68 次調査の遺構面が標高約 8.0 m北側の 19 次調査遺構面が約 7.2 mであることから、本調査地点は周囲よりも、比高差約１mをもって急激に低くなり、北側につづくことがわかる。周辺調査区で検出された弥生時代の遺構の残存状況を本調査区におけるそれと比較すると、本調査区だけが著しい削平をうけたわけではないと考えられるので、少なくとも弥生時代にはすでに、本調査地点から 19 次調査地点にかけては、台地の起伏の谷のなかにあり、周囲よりもある程度低い窪地状を呈していたことが推測される。このように考えると、本調査区では周囲の調査区と比較するともともと遺構密度が低かったと考えられる。

このような地形にある本調査地点では、弥生時代の土坑と中世の遺構が少数検出され、標高の高い南側に集中する。このなかでも、弥生時代中期後半の SK04、中世後半の大溝 SD02 をとりあげて、127 次調査のまとめとしたい。

① SK04

SK04 は周囲にセットになる柱穴がないことから、立柱遺構として報告するものである。南側に隣接する 114 次調査 1 区では、甕棺墓群が北側に展開することが判明しており、ほぼ同規模のスロープがつく立柱遺構 SX1049 が検出されている。本調査地点において甕棺墓が検出されることはなかったが、同時期の遺構である SK05・SK06・SK09 などからは、114 次調査からの流れ込みと考えられる丹塗磨研の精製土器や甕棺底部が出土している。本調査区周辺で検出された弥生時代中期後半の遺構群としては 114 次調査 1 区甕棺墓が最も近いことから、SK04 は 114 次調査地点に展開する中期後半の甕棺墓になんらかの関係がある可能性が考えられる。

② SD02（Fig. 26・Tab. 1）

SD02 は、中世後半に掘削された大溝で、本調査地点の東端にそって検出され、19 次調査地点の溝 2 に連続する。土層の堆積状況から恒常的な水の流れは考えにくく、排水の機能をもった溝状遺構であったと考えられる。出土遺物から 16 世紀末には埋没したとみられるが、SD02 が北流する調査地点東端の土地境界には戦前から機能している水路が現在も使用されており、SD02 がつながる 19 次調査溝 2 付近まで続いている（Fig. 26）。これらのことから、周囲よりも低い窪地状の地形に掘削された、SD02（127 次調査）・溝 2（19 次調査）は、中世後半から現代まで、掘り直しを繰りかえしながら継続的に排水路として使用されてきたと考えられる。

SD02 のように、中世後半に掘削され 16 世紀代に埋没する大溝は、現在までに那珂遺跡群の各所において検出されており、台地を縦横にはしっていたことがわかってきている（Fig. 26）。また、那珂遺跡群の南方に位置する五十川遺跡においても同様の大溝が複数地点で検出されている。文献史料には、文亀元年（1501 年）9 月 13 日に大内義興が那珂村 30 町などを家臣深野興信に安堵した記事や（『大内氏実録土代』）、天文 22 年（1553 年）4 月 13 日に大内氏家臣弘中氏の本知行地板付村が小原因幡守によって押領されたので、その替地として五十講村 25 町・下長尾村 30 町が大内氏から弘中氏へあてがわれた記事が記されている（『西郷文書』）。このように、中世後半に那珂遺跡群周辺は大友氏・大内氏家臣団の知行地となっていたようであり、これと大溝を関連づけて、大溝は知行された家臣たち

Fig.26　中世後期における周辺遺構配置図（S = 1/3000）

の屋敷地を囲む濠として機能していたと指摘されてきた。

しかし、本調査地点で検出された SD02 は、当該期の城館の典型例としてとりあげられる、有田遺跡群、御笠の森遺跡などで検出された方形区画溝と異なり、方形を指向することはない。また近辺に掘立柱建物や地下式土壙などをともなうわけでもない。このように、SD02 と共通の特徴をもつものには、ほかにも 114 次調査や 26 次調査 SD02 などが挙げられ、中世後期に位置付けられる大溝には、屋敷地を囲む濠だけではなく排水などの別の機能をはたしていたものもあったようである。

その一方で、113 次調査 SD01・75 次調査 SD01 などのように、矩形に溝が検出され流水の痕跡が確認されない空堀も存在する。これらの溝の内側には、出土遺物量が少ないことから、明確に濠にともなうと認定できる掘立柱建物などの遺構を認定しづらい状況にあるが、城館の典型例に近い特徴をもっているといえるだろう。また、19 次調査溝 10 に連続する 105 次調査 SD18・65 次調査 SD01 や、32 次調査 SD1001・1010 などは、直線的に 40 m～60 m程度検出されている溝であり、略正方位を意識して掘削されたと考えられ、より大きな規模の土地境界などの意味をもった区画溝である可能性も考えられる。

このように、現時点での調査成果を整理すると、那珂遺跡群において中世後期に掘削された大溝には、さまざまな機能をもつ溝が含まれている可能性があることがわかる。中世後期の遺構は、出土する遺物量が少ないため時期がしぼりこめず、同時存在した遺構を認定しづらいため、中世後期における那珂遺跡群の歴史的景観は判然としない。しかし、調査次数をかさねれば、溝と溝とのつながりや切りあいなどから、解明の糸口がつかめるかもしれない。今後の調査の進展に期待したい。

［ 参考文献 ］
荒牧宏行 2008『那珂 49 － 那珂遺跡群第 113 次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 982 集 福岡市教育委員会
田崎博之 1998 年「福岡平野における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
林潤也・平島義孝編『御笠の森遺跡Ⅱ』大野城市文化財調査報告書 65 集　大野城市教育委員会
山崎龍雄 2009「福岡市有田遺跡の戦国期曲輪状遺構について」第 9 回北部九州中近世城郭研究会資料

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかごじゅうはち
書　　名	那珂 58
副 書 名	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1121 集
編 著 者 名	松尾奈緒子
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 番地 1 号　TEL092-711-4667
発行年月日	2011 年 3 月 18 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
なかいせきぐんだいひゃくにじゅうななじちょうさ 那珂遺跡群 第 127 次調査	ふくおかしはかたくたけしたごちょうめちない 福岡市博多区 竹下 5 丁目地内	40132	1006	33° 34′ 11	130° 26′ 06	20100419 ～ 20100615	434	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那珂遺跡群 第 127 次調査	集落	弥生時代中期 中世前半・中世後半 近世	弥生時代－土坑 中世－土坑・溝・井戸 近世－溝	弥生土器・土師器・須恵器 瓦・輸入陶磁器・瓦器 石製品・黒曜石剥片など	とくになし

要　約

那珂遺跡群は、福岡平野を北流する御笠川・那珂川などの中小河川によって形成された、南北につらなる中位段丘面の上に立地しており、本調査地点は那珂遺跡群が立地する台地のほぼ中央にある。遺構面である鳥栖ローム層上面のの標高は、南側で 7.2 m、北側で 6.7 mをはかり、南から北へゆるやかに傾斜する。

本調査地点は、以前は宅地として利用されていたため北側を中心に攪乱が著しく、遺構の残存状況は良くない。また、本調査地点は、遺構が密集する周辺よりも低い地形にあったことから、そもそも遺構密度はうすかったようである。このため、検出できた遺構は周辺調査区に比べて少なく、そのほとんどは調査区南半に集中している。具体的には、弥生時代土坑 5 基、中世の土坑 2 基・井戸 2 基・溝 4 条が挙げられる。このうち、弥生時代の立柱状遺構とおもわれる SK04 および中世の濠とおもわれる SD02 は、周辺の調査成果に関連して注目される。遺物は、これらの遺構を中心にコンテナケース 2 箱分が出土した。

那珂　58
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1121 集
那珂遺跡群第 127 次調査報告
2011 年 3 月 18 日 発行

発行　福岡市教育委員会
印刷　正光印刷株式会社